

令和五年十二月一日 愛寿御礼祭<sup>おんれい</sup>

神 示

人生は 一日一日の活動・思いを重ね

有限の時代<sup>とき</sup>の中で実績<sup>かたち</sup>となる

その活動に 奉仕・「愛」がある人間<sup>ひと</sup>は

必ず礼を尽くして 万人・万物と関わっている

なれど 「人生の真理」を知らずに

「道」欠く人生<sup>にちにち</sup>を送る人々<sup>ひと</sup>が多い

奉仕に 「生きる」思いを欠くために

晩年に夢が持てず 人生を枯らして終わる

信者に申す

今年<sup>こんねん</sup>の真実<sup>すがた</sup>を知って

「真理<sup>おしえ</sup>」を人生<sup>こころ</sup>の支えに 歩んで迎えた愛寿<sup>いま</sup>の月

我が姿<sup>こころ</sup>はいかに

感謝<sup>おもい</sup>の心を届ける相手が 何人心に映っていようか

神に心預け 神魂<sup>ちから</sup>の運命を受けける信者は

ますます礼の思いを深めてゆく

得徳<sup>えとく</sup>の人生<sup>こころ</sup>を深め ますます品性を高めて行く

よって 家族の会話は 増えて 深まり 愛と信頼を育み

互いの期待に応える家族と成ってゆく

神に 神魂に―― 教会に 職員に―― 係に 信者に――

そして家族・縁者 友人・知人に―― 世の人々に――

礼<sup>こころ</sup>の思いを深めて生きて行く